Opinion
オピニオン

世界衆論
しゅうろん【衆論】
・多くの人の議論・意見〈広辞苑〉
・全国の智力に由て衆論を成し、その衆論の帰する所にて政府を改め、遂に封建の制度をも廃したる〈福沢諭吉「文明論之概略」〉

オバマのチェンジは成功するか

「理想と現実」両立人事／政権、無難な離陸

渡辺 将人さん（米ジョージワシントン大客員研究員）のワシントン報告

オバマ米大統領が欧州、トルコ歴訪の帰路、イラクを電撃訪問してワシントンに戻った。

初の本格的な外交への国内の評判は悪くない。就任から間もなく3カ月。政権はまずは無難なスタートを切った。

オバマ政権の大きな特徴は現実路線と理想路線の性格を併せ持っている点にある。明確なのが人事。閣僚にはヒラリー・クリントン氏を国務長官に指名するなど、現実重視の中道性をみせる半面、大統領府の実務部隊には環境や人権分野での立法経験があるリベラル派連邦議員の右腕的スタッフを起用、オバマ流にこだわった。

内政では約8千億㌦にも達する景気対策を成立させ、「離陸」は合格点との見方が強い。下院の共和党議員がそろって反対し、目標とした超党派路線はかなわなかったが、むしろ共和党の代案不在や方向性の喪失が浮き彫りになり、政権の痛手にはなっていない。中期的に不安視されるリベラル派の離反による民主党の分裂も、現時点ではナンシー・ペロシ下院議長のもと「自分たちが応援した大統領は支える」という暗黙の結束がある。ただ、大手保険会社AIG幹部の巨額賞与問題は打撃だった。政府の企業救済にまで批判が拡大すれば、経済政策を揺るがしかねない。「オバマなら怒りを共有してくれるはず」という期待感が市民の抗議行動を駆り立てたのは、なんとも皮肉だ。

未知数だった外交も米ロの戦略兵器削減をめぐる交渉に踏み出すなど野心的だ。クリントン国務長官の外遊もアジア重視やイスラム圏との対話姿勢を鮮明にした。一方、北朝鮮のミサイル発射は多国間の連携によって危機に対応する「調整力」が試される。最大の焦点がアフガニスタンというのは関係筋の一致した声だ。オバマ氏はイラク戦争に一貫して反対、反戦派の信任を得て頭角を現した。アフガンを泥沼化させれば党内外に批判が広がるジレンマを抱える。

（著書に「オバマのアメリカ」など。東京財団現代アメリカ研究プロジェクトメンバー。34歳）

保守・愛国・信仰 まとうリベラル
議会対策には苦慮、頼みは草の根

水野 オバマ氏は大統領選で若者、女性、黒人、ヒスパニックの支持を集めた（❶）。マイノリティーによる多数派連合だが、これは、大恐慌時にルーズベルト大統領が作ったニューディール連合のように定着して政治の流れを変えるのか。それとも熱が冷めたら崩れてしまうのか。

久保 08年の大統領選は従来と異なる意味を持っていた。黒人の候補者が本当に大統領になれるのか。アメリカは理想を委ねにたる国なのか。アメリカ人の自己認識を懸けた選挙だった。

「オバマでなきゃダメだ」「オバマしかイヤだ」といった積極的な支持者が目立った。多くの人が投票日にオバマ氏の勝利演説を聞いた。アメリカが変わる瞬間を見届けたいということだ。支持が民主党から中道派、穏健派の共和党員にまで広がっていた。

中山 ブッシュ政権下の経済、外交の破綻で変化への機運が充満していた。オバマ氏は選挙運動で「Change is in the air」と言った。変化が起こりつつあるということだろうが、このような場の空気に一番共鳴したのがオバマ氏だった。

リベラル派と規定されがちだが気質は極めて保守的。信仰の人でもあり、自らのライフストーリーをアメリカでしか実現できないと言い切る愛国者だ。保守的で愛国主義的で信仰の人。保守派の3点セットを身につけながら、民主党の候補として登場したのが強みとなった。

足立 オバマ氏は一般投票で53%も獲得した。戦後の民主党大統領では1964年のジョンソン大統領につぐ高率で、カーター、クリントン両大統領も届かない。4年前に上院議員に当選したばかりという経験のなさを批判されたのに、これだけの票を集めた。過去数回の大統領選とは違う投票行動が起きた。明白なのは穏健派共和党の退潮だ。アメリカの政治地図に地殻変動が起きている。

■ ■

水野 オバマ氏は「イラク反戦」を掲げたリベラルだった。しかし選挙中の人種問題の演説や就任演説では保守のキーワードである「責任」を使った。リベラルか中道か。自らは「ニューデモクラットだ」と語る。ビジネスも重視する民主党の中道勢力のことであり、弱者への配慮と財政規律を両立させると言いたいのだろう。

足立 従来の黒人候補と違う。公民権運動出身のジェシー・ジャクソン師やアル・シャープトン師は黒人の利益代表であって、多くの白人に「政府に福祉を要求するだけ」と思われた。オバマ氏は民主党の予備選で「レーガンは米国政治の方向性を大胆に変えたが、ビル・クリントンは変えなかった」と発言し、物議をかもした。クリントン夫妻はリベラル色ゆえ保守勢力から反発を招いた。オバマ氏は立場の異なる勢力とも対話に努めようとする党派色の少なさが特色だ。分断化されたアメリカ政治を変える狙いがある。

久保 ジャクソン師は「アメリカは人種差別の場である」と白人を批判したが、オバマ氏は絶対にアメリカ批判をしない。逆に「政府に頼るだけではダメだ」とか、「父親は子どもの面倒をみなければいけない」とか、社会の規律を強調する。そこが公民権運動型の指導者とはまったく違う。

民主党の強いハワイで育ち、シカゴで政治家となり、上院議員としての投票行動も左寄のだった。オバマ氏が以前からニューデモクラットだったとは思えない。民主党内でクリントン氏に勝利した後に中道にシフトした。中核にある信念が分からない面はあるが、そこは柔軟で現実的という良さにもつながる。

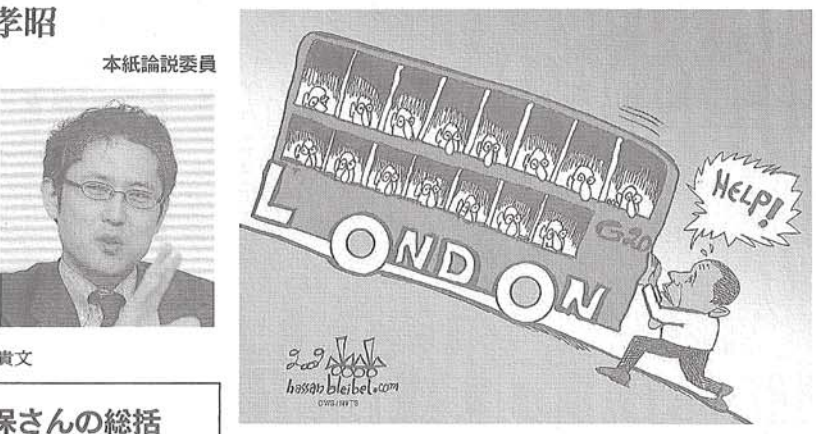
水野 オバマ氏は自らを「雑種」と呼び、「一族が集まるとミニ国連総会だ」と言う。人種についても白人、黒人に「ブラウン」を加える。奴隷の子孫ではないオバマ氏は黒人よりブラウンに近い印象だ。アメリカでは近年、移民の多様化や人種間の結婚で、「白人対黒人」の図式が崩れつつある。人種対立に飽き飽きしていた高学歴層には、オバマ氏が人種融和の理想を体現しているように映るのだろう。

ただ、議会対策では苦労している。超党派を掲げたが説得は難航。そこで議会を飛び越え、選挙運動のように地方遊説や市民集会をやり、インターネットで支持者を組織している。こうした草の根キャンペーンは選挙戦では成功したが、政権としてはどうか。

久保 オバマ陣営は約1300万人のメーリングリストを持っている。強力な武器だが、必ずしもオバマ氏のメッセージだけが国民に届くわけではない。パーマネントキャンペーン（常時選挙運動）には限界がある。少なくとも民主党はまとめ、議会を通じて政策を実現することの方が重要だ。景気刺激と予算決議に反対した民主党保守系の下院議員がカギを握る。

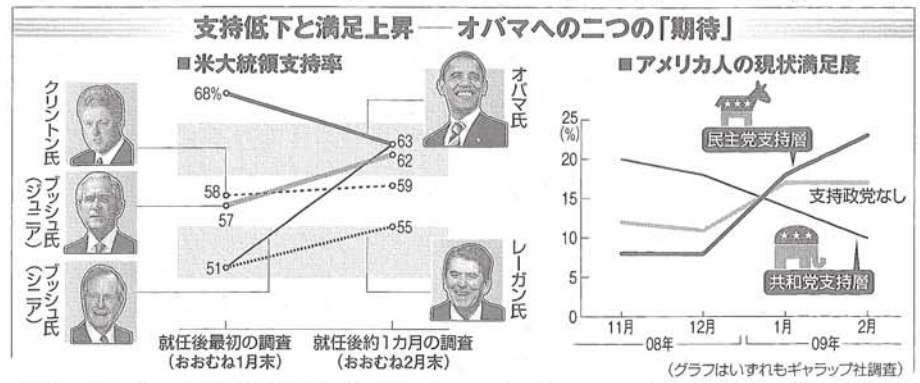
中山 統治のツールとしてネットを用いた前例はない。1300万人は「自分たちがオバマ氏を大統領にした。自分たちのバラクだ」という意識が非常に強い人たちの集まりで、密度の濃い支持集団だ。だが、それが議会にどれだけ政治的な効果を及ぼすかは未知数だ。

❶オバマ氏は黒人で95%、30歳未満で66%、ヒスパニックで67%、女性で56%を獲得、共和党のマケイン氏を上回った。（米メディアの出口調査による）



「助けて！」

ハッサン・ブレイベル
©New York Times Syndicate



東京財団リポート

世界衆論は毎月、本紙記者と東京財団の現代アメリカ研究プロジェクト（久保文明リーダー、中山、足立両氏もメンバー）の担当者が議論、今後はゲストの論者も招く。このリポートもプロジェクトが担当する

就任直後、最高水準の68%を記録したオバマ大統領の支持率は1カ月後、歴代政権と似たレベルに落ち着いた（グラフ左）。その後は横ばいが続く。共和党支持層の支持離れが目立つ半面、民主党支持層及び支持政党なし層の支持は揺らいでいない。アメリカの現状に「満足」が共和支持層で減っているのに民主支持層では増えていることと、合致する（同右）。足元の支持は固めているといえる。

（細野豊樹・共立女子大准教授）

初の外遊——「強固な対話論者」開花
政策連発——「手を広げすぎ」不安も

水野 G20サミットで本格的な外交活動を始めた。外交は未経験といわれたが、なかなかどうして国際舞台での振る舞いも堂に入っていた。行く先々でブーイングを受けたブッシュ前大統領とは様変わりだ。アメリカ国民は「オバマを選んでよかった」と思ったのではないか。

中山 オバマ外交の報道で面白い言葉を見つけた。フランクリン・ドクトリン。ソウル歌手の大御所、アレサ・フランクリンの代表曲「Respect」にひっかけた造語で、オバマ氏の他国への姿勢には敬意（Respect）があるという意味だ。外交に関して強固な対話論者であると同時に、相手の立場を尊重し、理解し、そのうえで議論を詰めていこうという彼のスタイルが、欧州から中東にまで足を延ばした一連のツアーで一気に開花した。

足立 経済政策への批判が続き、政権の支持率が揺らぎかねない状況だったが、今回の歴訪で持ち直し、順風が吹く展開になった。イスラムなど異文化を対等にみて、関係を修復していく姿勢は新鮮だ。オバマ色を明確にし、アメリカに対する見方を好転させた。選挙キャンペーンの雰囲気が戻ってきたかのようで、プラハでの核軍縮演説では得意の「Yes we can」も飛び出した。

中山 たしかにオバマ外交はキャンペーンモード。厳しくいえばまだメッセージを発しているだけの段階だ。実際にはG20宣言は妥協の産物だし、最大の懸案であるアフガニスタンについても、軍事以外の支援が必要だという一点で一致したに過ぎない。米国と欧州の亀裂は依然、残る。実質的な外交はこれからだ。

外遊のさなか北朝鮮がミサイルを発射した。日米は国連安全保障理事会で新たな決議を求める構えだが、オバマ氏は対話のきっかけは模索し続けるだろう。日本は彼の発言や行動の微妙な変化に注意し、アメリカの方向転換を事前に察知する必要がある。

水野 外交においても、核廃絶だとかイスラム社会への敬意とかでリベラルの筋を通す。一方で、核兵器のあるうちは抑止力が必要だとか、自分が生きているうちにはできないかもしれないとか留保をつける。理想主義的なメッセージと現実に立ち向かうプロセスの難しさは峻別している。

ただ、保守派からすれば、トルコ国会での演説の際、アルメニア人問題で「虐殺」という言葉を使わない気配りや、国防予算の削減、核軍縮演説で核使用国の「道義的責任」に言及したことなどに、「インテリの弱腰外交」との反発がでるのではないか。

足立 オバマ氏は16日からメキシコを訪問する。これまでバイデン副大統領を欧州や中東に派遣したり、クリントン国務長官が初外遊でアジアを回ったり、政権として世界に目を向けている印象だ。中東に特化せざるを得なかったブッシュ前政権とは違う。

■ ■

中山 内政はどうか。オバマ氏の景気刺激策は非常に野心的で大胆。教育、環境、エネルギー、医療保険と手を広げすぎの印象すら受ける。「The world as it should be」。「世界はこうあるべきだ」という地点からはじめ、実現可能な線まで落としていくのがオバマ流。明確な使命を担って大統領になったという意識もあり、政権に勢いのあるうちに「あるべき世界」に向けていけるところまでいく意気込みだろう。

久保 オバマ氏は「これまで先送りしてきた問題に手をつけなければいけない」と言う。だが、そんなに一遍にやってもうまくいくというのがワシントンの常識だ。ただ、危機においては常識は非常識ともなりうる。

足立 ワシントンで「オバマ氏は手を広げすぎ」という言葉をしばしば聞いた。共和党はもちろん民主党からも、オバマ氏のやり方を疑問視する声が出ていたのが印象的だった。

水野 とはいえ、共和党もオバマ人気に有効な対抗策が見いだせていない。党のアイデンティティーを見失っているようだ。

足立 支持率の低下（❷）など世論調査も共和党に厳しい数字を示している。

久保 共和党に突きつけられているのは、いまの経済危機を市場原理主義で解決できるのか、危機に臨んで政府は何もしないでよいのかという点だ。オバマ政権の対応は民間への統制を強める内容で社会主義そのものだと批判するだけでは、不十分ではないか。

中山 共和党の保守派が勢いを失っている。「小さい政府で市場への介入を避ければ、すべてうまくいく」という市場原理主義は旗色が悪い。だが、大きな政府にすれば事がすむとも言えない。

足立 税の問題が今後の焦点になるだろう。歳出が拡大する中、税のあり方は大きな対立点だ。オバマ氏は「勤労世帯の95%が減税になる」と主張するが、エネルギー政策などで間接的に負担が増すと保守派は反発している。

水野 オバマ氏は「政府には役割がある」と財政赤字を覚悟で「大きな政府」の方向に戻っている。だが、党派を超えて歳出の肥大化を警戒する声は根強い。この立場の違いが新たな対立軸となるだろう。

❷ニューヨーク・タイムズの最新の世論調査では共和党の支持率が31%と25年ぶりの低水準まで下がった。

民主党保守派との関係 焦点

20世紀のアメリカでリベラル派の大きな政府論が主流になったのはほんの短い期間である。1930年代の大恐慌時、ルーズベルト大統領のニューディールと、ジョンソン大統領による60年代の「偉大なる社会」の時だけだ。

政府の役割についてのアメリカの考えは日本よりはるかに市場寄りで、「小さな政府」原理主義が強い。オバマ政権の景気刺激策に民主党保守派と共和党の下院議員全員が反対したのも、大きな政府に寄りすぎて財政赤字が心配だったからだ。だが、オバマ大統領は60年代のような「大きな政府」に戻ろうとはしていない。財政赤字を4年で半減すると宣言しており、これこそが一番大胆な公約というべきだ。

オバマ氏は選挙で中道にシフトし、支持を広げた。危機の時代にはドグマにとらわれない指導者が好ましい。ただ、これも行き過ぎれば信念がない政治家と認識されてしまう。皮肉にも民主党保守派がどの程度、中道化したオバマ氏についていくかが、内政での成否を決めるであろう。彼らからみると、オバマ氏の政策は非常にリベラルにみえることを忘れてはならない。

久保 文明さん
東大法学部教授
くぼ・ふみあき アメリカ政治。著書に「ニューディールとアメリカ民主政」、「アメリカ政治」（共著）など。52歳。

足立 正彦さん
住友商事総合研究所シニアアナリスト
あだち・まさひこ 専門はアメリカ大統領政治・選挙分析。著書に「米大統領候補人脈の研究」（共著）。44歳。

中山 俊宏さん
津田塾大准教授
なかやま・としひろ アメリカ政治外交・政治思想。共著に「米中関係」「アメリカ外交の諸潮流」など。42歳。

水野 孝昭
本紙論説委員
みずの・たかあき 82年、朝日新聞社入社。ハノイ、ワシントン特派員、ニューヨーク支局長などを経て、現職。50歳。

構成／吉田貴文

久保さんの総括

The Asahi Shimbun